心道館のあゆみ　（平成４年、心道会館竣工時のパンフレットから転載・補記）

心道館竣工記念写真

＜はじめに＞

「心道会館」の前身である「心道館」は、昭和６年(1931)に三田・三輪町内の武道愛好家が地域の武道発展と青少年の健全育成を願って、建設された道場である。

＜明治時代＞

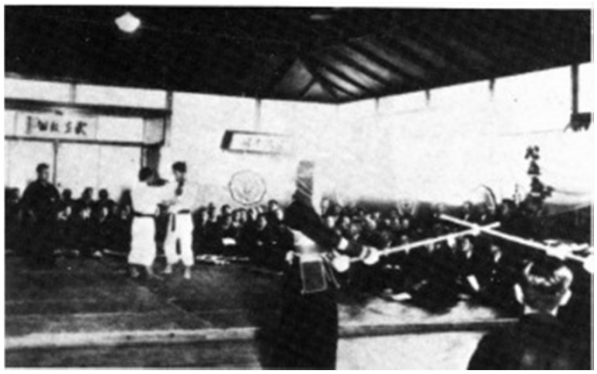
三田は藩政時代、三田藩３万６千石の城下町として発達し、武道については熱心なところであった。維新後も藩の柔道、剣道両指南の指導のもと、桜の馬場で稽古が続けられていた。しかし、明治４年(1871)の廃藩置県とともに次第に武道は下火になってきた。

明治32年(1899)頃には、新町(現中央町・二番区)の廃寺一乗寺、また、明治34年(1901)頃には、阪鶴鉄道(現ＪＲ)三田駅前にあった倉庫等を借りて細々と練習が続けられていた。

明治39年(1906)、桶屋町(現中央町・一番区)の医師、和田精才は、「医家の任務は、単に患者の治療にあたるだけではなく、平素より進んで住民の健康を守り、心身の鍛練を行うことにある」と、三輪の石井永之介らと摂北体育会を組織して、自ら会長となり、師範として伊丹町(現伊丹市)の小西酒造の修武館から吉植末吉４段を招いた。屋敷町の旧郡役所跡に演武場を設け、青少年に柔道、剣道を教えた。指導者の評判を聞いて入会者も多く、毎夜、道場から柔剣道の勇ましい掛け声が聞こえたという。寒稽古は厳寒の早朝に行われ、多いときには、80～90人ほども集まった。稽古がすんだ後には、先生の振る舞いで熱いうどんやぜんざいをご馳走になり、盛会を極めたという。

＜大正時代＞

大正６年(1917)頃、大歳神社馬場先(現南ヶ丘)にあった公会堂(土木出張所)へ移転した。この建物は木造２階建てで、徴兵のときにはここで１ヵ月間軍事教練を受けたところである。この大歳さんの道場へ通う途中、冬の早朝、豆柔道家たちが泥棒を捕まえ警察に突き出すという手柄話や西山で兎狩りをした思い出などもあったという。



＜昭和前期＞

その後、小寺遊園地にあった三田幼稚園の一部を借りて練習が続けられた。

郡内に武道の本格的な道場がないところから、地元の柔道愛好者の如月会を中心に、有志が集まって武道場を建てることにし、銀行の融資を受ける一方、町民の協力を得て50銭の日銭頼母子講で資金を捻出した。

心道館が竣工したのは昭和６年(1931)の秋である。「心道館」の名称は、吉植末吉師範の「武道の道は心の修養に通じるので『心道館』としては」という案が採用され、命名されたと伝えられている。

昭和８年５月26日に開かれた竣工祝賀武道大会では、武徳会範士の磯貝10段、なぎなたの三田村範士をはじめ、吉植師範がこれまで指導をしてきた伊丹の修武館道場、伊丹中学、柏原中学、三田中学、三田農林(現有馬高校)らから選手がつめかけ、熱戦を展開した。

＜戦時中＞

太平洋戦争が激しくなるにつれ、学校教育での柔剣道、教練などは強化されたが、終戦直前になると食料不足などで練習に来る青少年も少なくなり、指導者も出征して道場は閉鎖状態となってしまった。

＜戦後＞

終戦になって占領軍の進駐と共に日本武道にピンチが訪れた。ＧＨＱ(連合国軍最高司令部)は、日本の戦時教育体制を取り払うことに集中し、昭和20年(1945)10月に柔剣道教練の禁止、11月に武道の禁止と矢つぎ早やに通達を出し、軍事的色彩をもつ武道は姿を消していった。

戦後、昭和23年12月に施設は三田町に移管、町の公会堂として住民に利用されるようになった。昭和25年(1950)に学校柔道の復活が許可され、学校で再開された昭和26年１月29日から、再び武道場として使用されるようになった。吉植師範ら熱心な指導者のもとで60～70人の小中学生が練習に訪れ、当時の生徒の中から県下高校柔道選手権大会の優勝者も出ている。

昭和42年(1967)から「少年武道教室」が開かれ、この教室で育った青少年たちによって日米親善少年柔道大会が開かれるきっかけをつくった。

＜新築改装＞

平成４年(1992)１月５日、武道を通じて青少年の健全育成と、地域のコミュニティ活動の場として新築改装され、名称も「心道会館」と改まった。